

「通いの場」の参加者ならびボランティアにおける参加後の心理社会面の変化

研究分担者 加藤 清人（平成医療短期大学リハビリテーション学科 教授）

研究代表者 竹田 徳則（星城大学リハビリテーション学部 教授）

研究分担者 近藤 克則（千葉大学予防医学センター 環境健康学研究部門 教授）

研究要旨

本研究では、通いの場の参加者及びボランティアにおける参加後の心理社会面の変化を明らかにすることを目的とした。日本老年学的評価研究（JAGES）プロジェクト参加7市町の通いの場109箇所の参加者3,305人のうち調査回答の得られた2,983人（回収率90.3%）を分析対象とした。自記式調査票のなかより基本属性、心理社会面に関連する10項目、GDS-15項目版、参加期間を分析に用いた。全対象者と参加形態別（参加者・ボランティア）における、心理社会面に関する10項目の良好な回答をした者の割合をクロス集計にて分析した。また、うつ状態別、参加期間別でも確認した。

その結果、通いの場参加2,983人における参加後の心理社会的な良好な変化の割合では、参加者・ボランティアともに、健康意識や人との交流機会が8割以上の者が増加したと回答していた。また、それらはうつ状態別でも、健康意識や人との交流機会が「うつ傾向」7割以上、「うつあり」6割以上と半数以上であった。さらに、参加期間が長くなるほど心理社会的に良好な回答をする者の割合が増加する傾向があった。

7市町の通いの場参加者とボランティアともに健康意識や人との交流機会が増えたが約8割であったことは、サロン参加によって心理社会面の良好な変化を期待できるものと考えられる。

A. 研究目的

厚生労働省は地域づくりによる介護予防推進策のなかで、住民が運営する通いの場の充実を掲げている。高齢者が社会参加や役割を担うことで、地域住民の互助を促進し、健康寿命の延伸を目指している。

本研究課題で対象としているうちの愛知県武豊町での取り組みのなかで、ボランティアや参加者における通いの場参加後の変化として、「おしゃべり相手、人の役に立っている、何かと一緒に取り組む相手などが増加」¹⁾す

るなど、通いの場への参加が心理社会面に良好な変化が報告されて効果を示す可能性が指摘されている。しかし、他市町を含めた場合でも、同様の変化が確認できるのかは検討はされていない。

そこで本研究では、通いの場の参加者及びボランティアにおける参加後の心理社会面の良好な変化について分析対象市町を増やし明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

1. 用いたデータ

日本老年学的評価研究 (JAGES) プロジェクト参加31市町村のうち、7市町の協力を得て、2015年12月から2016年2月の期間に、通いの場109箇所の参加者3,305名を対象に自記式調査票の配布と回収を行った。分析対象は、回答の得られた2,983人 (回収率90.3%) とした。

2. 用いた指標

1) 心理社会的に関連する変数

参加後の心理社会的変化に関する質問項目は以下の通りである。「人との交流は」、「通いの場 (サロンなど) 以外の会 (趣味やスポーツの会・老人クラブなど) への参加は」、「健康に関する情報は」、「将来の楽しみは」に対し、「明らかに増えた」、「多少増えた」、「どちらでもない」、「多少減った」、「明らかに減った」で回答を得た。「気持ちの明るさは」では、「とても明るくなった」、「多少明るくなった」、「どちらでもない」、「多少減った」、「多少暗くなった」。「健康について」は、「とても意識するようになった」、「多少意識するようになった」、「どちらでもない」、「どちらか」という意識しなくなった、「まったく意識しなかった」、「しあわせを」では、「とても感じるようになった」、「多少感じるようになった」、「どちらでもない」、「どちらか」という感じなくなった、「まったく感じなくなった」。「まったく思わない」にて回答を得た。

2) うつ

高齢者抑うつ尺度 (Geriatric Depression

Scale; 以下, GDS) 15項目版を用いた。

3) 参加期間

『あなたは、「通いの場 (サロンなど)」に参加し始めてから何年経過しましたか』に対して、「5年以上」、「4年」、「3年」、「2年」、「1年」、「1年未満」、「わからない」にて回答を得た。

3. 分析方法

心理社会的変化に対する設問10項目において、それぞれの得られた回答から「明らかに増えた・多少増えた」を「増えた」、「とても明るくなった・多少明るくなった」を「明るくなった」などを良好な変化とし、分析に用いた (表1)。またGDSは、0~4点を「うつなし」、5~10点を「うつ傾向」、11点以上を「うつ状態」とした。参加期間では、「1年未満」、「1~2年」、「3~4年」、「5年以上」、「わからない」に分けた。

まず、参加後の心理社会的な項目で良好な回答が得られた参加者の割合を全対象者ならびに参加形態別 (参加者・ボランティア) でクロス集計にて分析した。次いで、うつ状態別、参加期間別についても確認した。

本研究は、星城大学研究倫理委員会の承認 (2015C0013番号) を受け、各自治体との間で定めた個人情報取り扱い事項を遵守したものである。

C. 研究結果

今回の対象者2,983人のうち参加者1,425人 (47.8%)、ボランティア509人 (17.1%)、参加形態無回答者1,049人 (35.2%) であった。

1. 全対象者ならびに参加形態別による参加後の心理社会的変化

通いの場参加者全体の参加後における良好な心理社会的変化の割合では、「健康について意識するようになった」と回答している者の割合が84.0%と最も多く、次いで「健康を保つことができていると思うようになった」が82.2%と多かった(図1)。参加形態別で見ると、「人との交流が増えた」では、参加者82.0%に対し、ボランティア90.9%であった。「健康について意識するようになった」が参加者85.8%に比し、ボランティアが88.8%であり、その他として「しあわせに感じるようになった」、「地域には助け合いの気持ちがあると思うようになった」、「健康を保つことができていると思うようになった」で、8割以上の者が肯定的に回答していた。(図2)。

2. うつの程度別にみた心理社会的変化

今回の対象者2,983人のうち、「うつなし」が2,036人(68.3%)、「うつ傾向」348人(11.7%)、「うつあり」87人(2.9%)、うつ状態無回答512人(17.2%)であった。また、参加形態別によるうつ状態割合については、表2に記載した。

まず、全対象者におけるうつ状態別の心理社会的変化の割合では、「健康について意識するようになった」、「人との交流は増えた」、「『地域には助け合いの気持ちがある』と思うようになった」と回答している者が、「うつなし」者が8割以上、「うつ傾向」者で7割以上、「うつあり」者を見ると、6割以上と半数以上であった(図3)。

次に、参加者の「うつなし」者と「うつあり」者を見ると、「健康について意識するようになった」と回答する者が多いのに対し、「うつ傾向」者では「地域には助け合いの気持ちがある」と回答している者の割合が多かった(図4)。一方で、ボラン

ティア者における比較において、「うつなし」者と「うつあり」者では、「健康について意識するようになった」と回答する者が多いのに対し、「うつ傾向」者では「地域には助け合いの気持ちがある」と回答している者の割合が多かった(図5)。

3. 参加期間別にみた心理社会的変化

今回の対象者2,983人の参加期間では、「1年未満」が459人(15.4%)、「1~2年」が569人(19.1%)、「3~4年」672人(22.5%)、「5年以上」が1,013人(34.0%)、「わからない」35人(1.2%)、参加期間無回答が235人(7.9%)であった。

全対象者における参加期間別の心理社会的変化の割合をみると、「人との交流が増えた」と回答している者の割合が、「1年未満」者が74.3%であったのに対し、「5年以上」者では88.5%と14.2%の差がみられた。「通いの以外の会への参加が増えた」では、「1年未満」者45.8%、「5年以上」が59.5%と13.7%の差が、「気持ちが明るくなった」では、「1年未満」者67.8%、「5年以上」が80.8%と13.0%の差がみられた。ほとんどの質問項目で、参加期間が長いほど良好な回答をする者の割合が多かった(図6)。

D. 考察・結論

通いの場参加による参加後の良好な心理社会面の変化を確認したところ、参加者とボランティアともに「健康について意識するようになった」や「健康を保つことができていると思うようになった」、「対人交流の機会が増えた」など、健康面や対人面において良好な変化を感じている者の割合が多いことが判明した。今回、うつの程度別での心理社会的変化の割合についても比較した。その結果、「うつな

し」者と「うつあり」者で、「健康について意識するようになった」と回答する者が多いのに対し、「うつ傾向」者では「地域には助け合いの気持ちがある」と回答している者の割合が多かった。

愛知県武豊町のボランティアと参加者ともに、通いの場へ参加することで健康関連の情報の授受が増えること、おしゃべり相手が増加したとの報告^{1,2)}と同様の結果が得られたと考える。また、「うつ傾向・うつあり」者においても変化がみられたことは、通いの場へ参加することで顔馴染みや気軽に話しかけられるといった参加者同士の良好な関係から健康情報の授受に繋がっているのではないかと考えられる。

さらに、参加期間別での比較をした結果、年数を重ねることで良好な回答をする者の割合が増加する傾向があったことは、活動継続が心理社会的効果が維持されるとともにさらに高まる可能性が考えられた。

E. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

F. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

G. 文献

- 1) 竹田徳則, 近藤克則, 平井寛. 心理社会的因子に着目した認知症予防のための介入研究-ポピュレーション戦略に基づく介入プログラム理論と中間アウトカム評価: 作業療法. 2009, 28(2), p.178-186.
- 2) 大浦智子, 竹田徳則, 近藤克則, 木村大介, 今井あい子. 「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受 サロンは情報の授受の場になっているか?: 保健師ジャーナル. 2013, 69(9), p.712-719.

表1. 通いの場参加後の変化に対する設問と用いた変数

設問	用いた変数
人との交流は	1. 増えた 2. どちらでもない 3. 減った
通いの場(サロンなど)以外の会(趣味やスポーツの会・老人クラブなど)への参加は	1. 増えた 2. どちらでもない 3. 減った
気持ちの明るさは	1. 明るくなった 2. どちらでもない 3. 暗くなった
健康に関する情報は	1. 増えた 2. どちらでもない 3. 減った
健康について	1. 意識するようになった 2. どちらでもない 3. 意識しなくなった
しあわせを	1. 感じるようになった 2. どちらでもない 3. 感じなくなった
将来の楽しみは	1. 増えた 2. どちらでもない 3. 減った
「地域には助け合いの気持ちがある」と思うようになりましたか	1. そう思う 2. どちらでもない 3. 思わない
「地域の人は信用できる」と思うようになりましたか	1. そう思う 2. どちらでもない 3. 思わない
健康を保つことができていると思いますか	1. そう思う 2. どちらでもない 3. 思わない

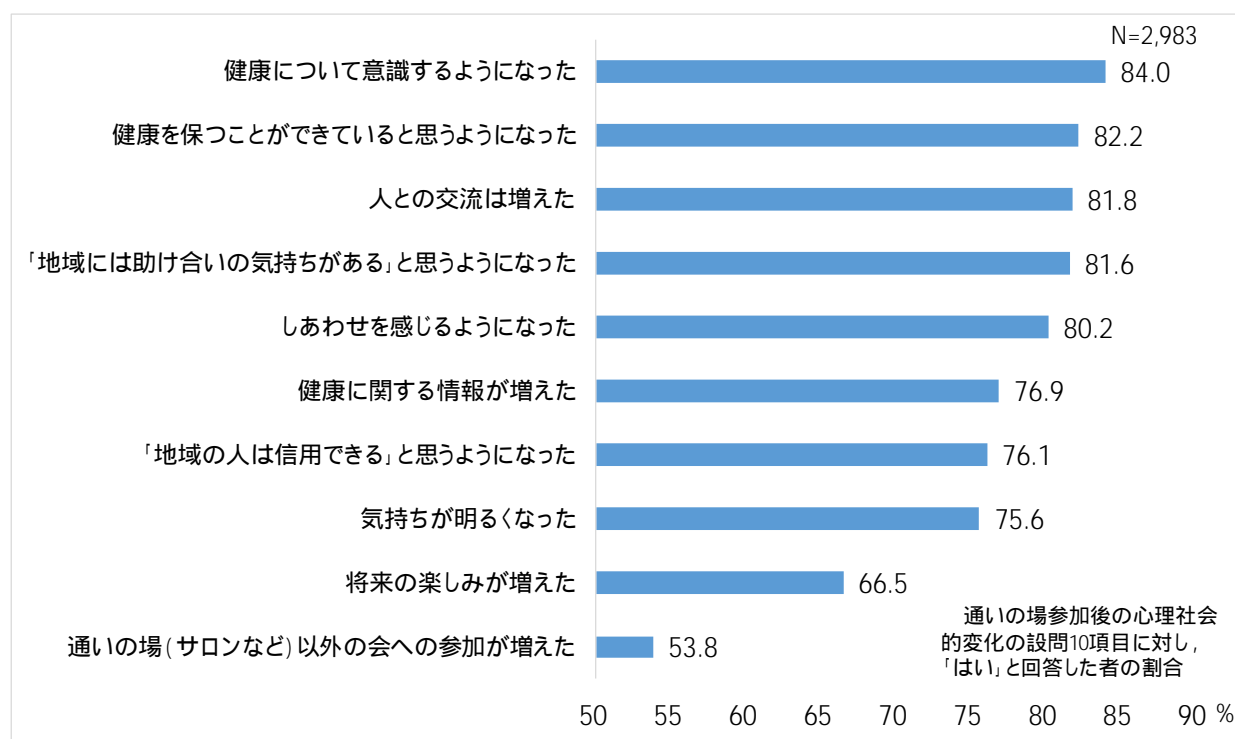


図1. 全対象者における通いの場参加後の心理社会的な変化の割合

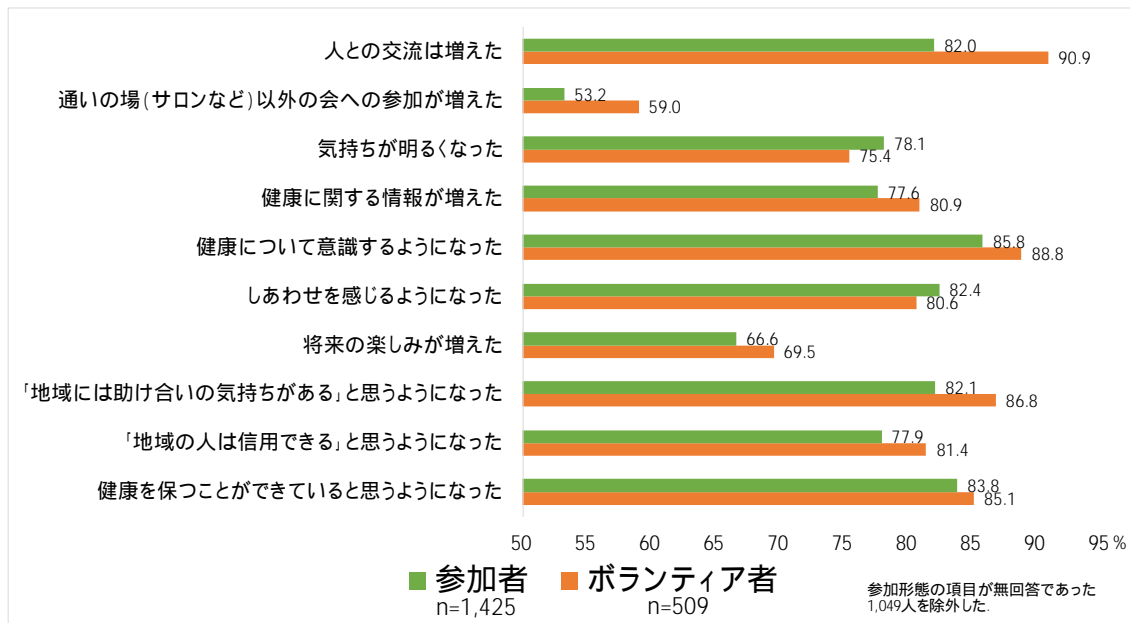


図2 . 参加形態別にみた通いの場参加後の心理社会的な変化の割合

表2 . 参加者・ボランティア者におけるうつ状態別の割合

		うつなし	うつ傾向	うつあり	無回答	合計
参加者	度数	930	191	49	255	1425
	%	65.3%	13.4%	3.4%	17.9%	100.0%
ボランティア	度数	429	29	4	47	509
	%	84.3%	5.7%	0.8%	9.2%	100.0%
無回答	度数	677	128	34	210	1049
	%	64.5%	12.2%	3.2%	20.0%	100.0%

うつの判定においては、GDS-15項目版により0～4点「うつなし」、5点～10点「うつ傾向」、11点以上「うつ状態」とした

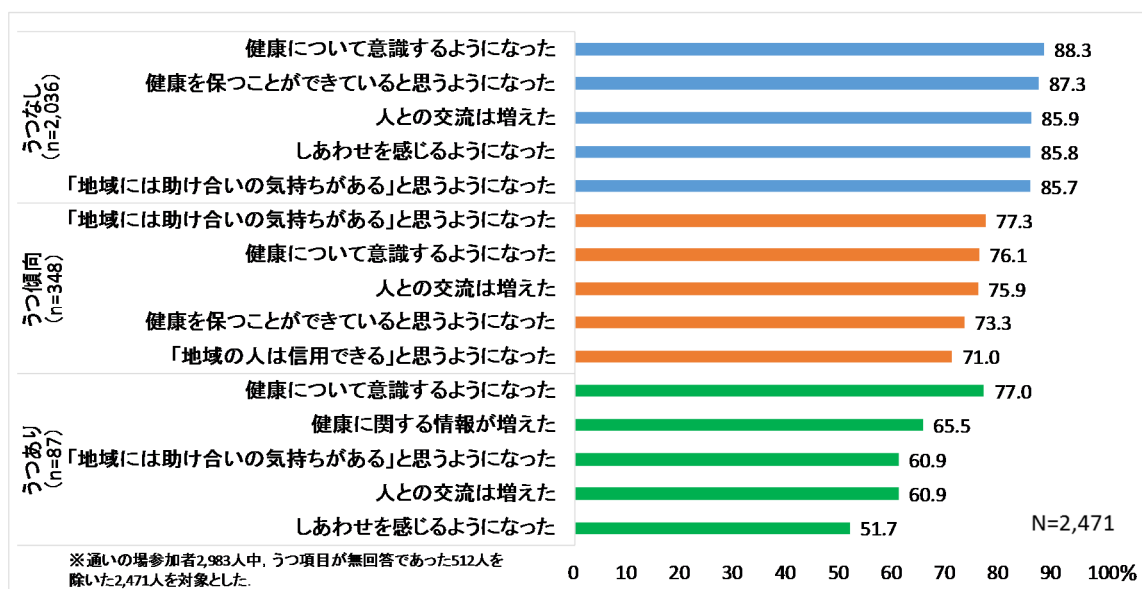


図3 . うつ状態別にみた通いの場参加後の心理社会的な変化の割合

(全対象者；上位5項目)

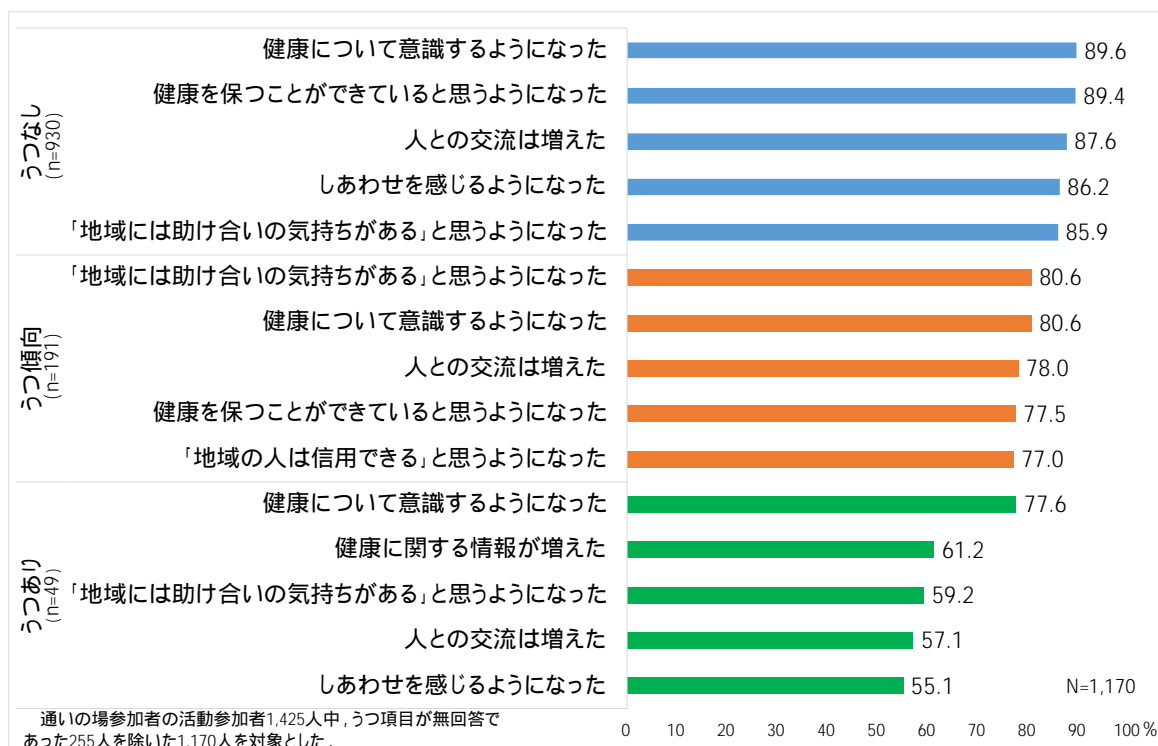


図4．うつ状態別にみた通いの場参加後の心理社会的変化の割合
(参加者；上位5項目)

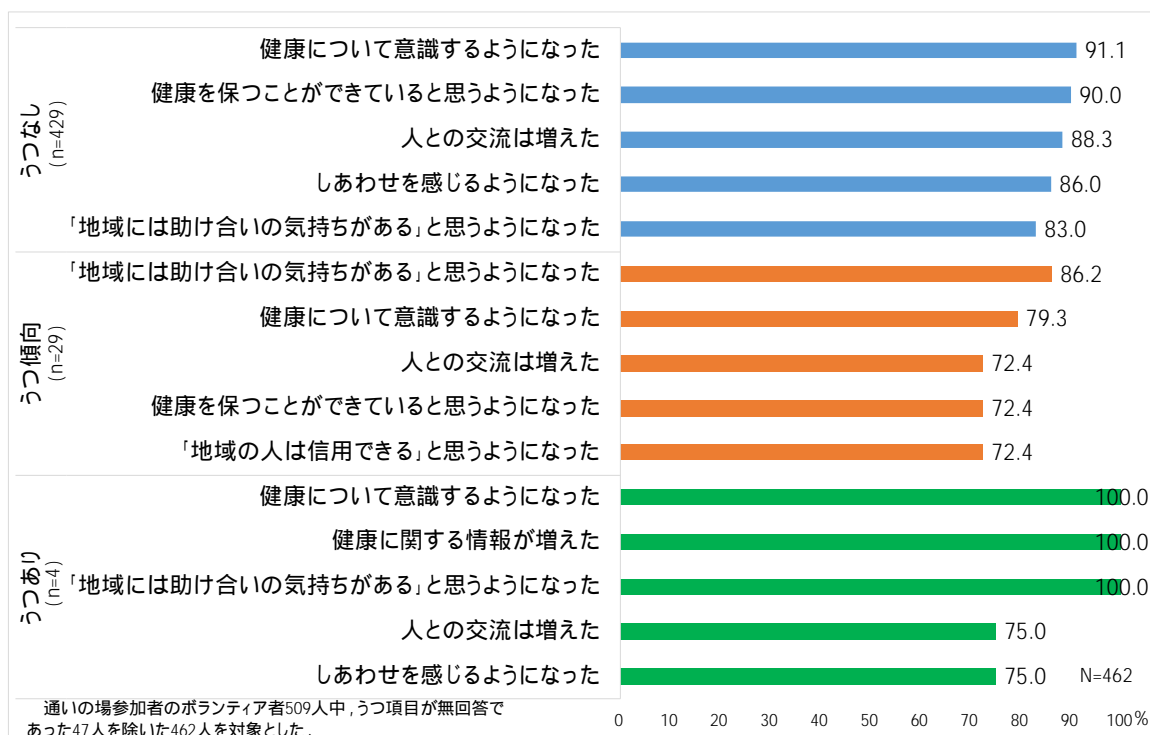


図5．うつ状態別にみた通いの場参加後の心理社会的変化の割合

(ボランティア ; 上位5項目)

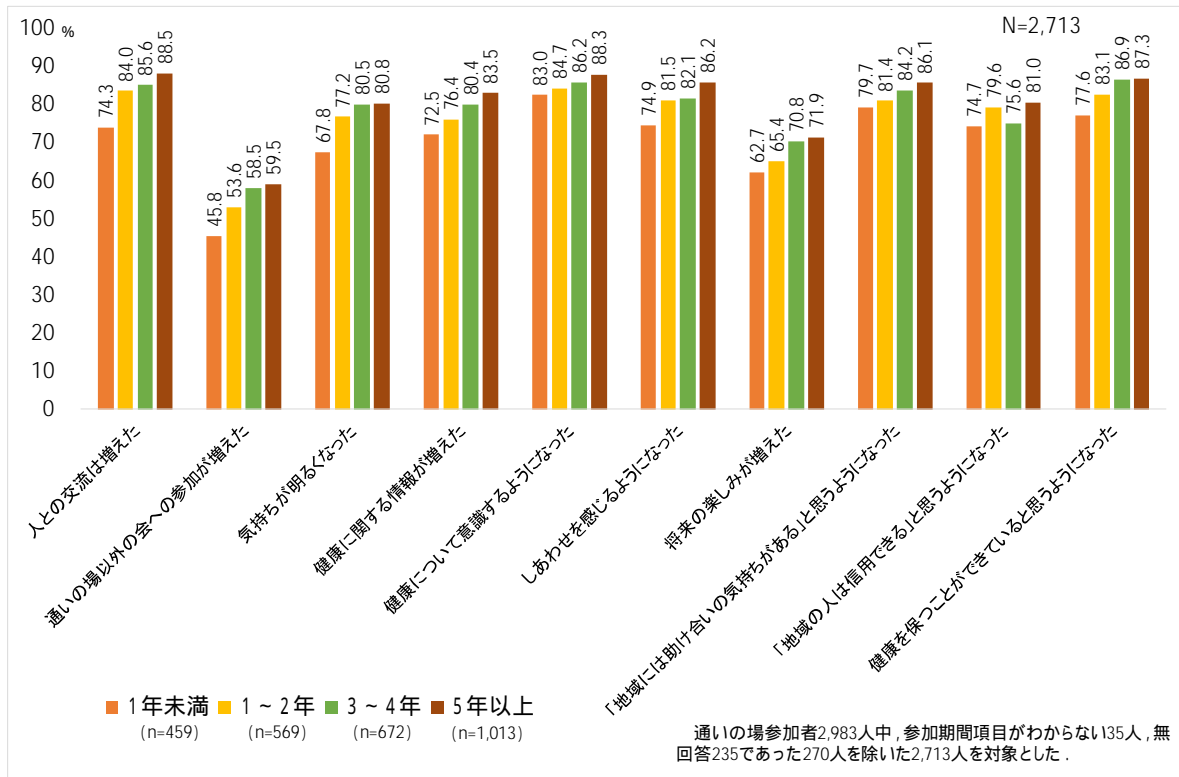


図 6 . 参加期間別にみた通いの場参加後の心理社会的変化の割合 (全対象者)